

プラント著「ソクラテスの弁明」岩波文庫、岩波書店 1927年7月3日刊を読む

1. 真実を語る者を雄弁家と呼ぶ(P15)
2. 私は国法に従い、そうして弁明しなければならない(P19)
3. 彼は何も知らないのに何かを知っていると信じており、これに反して私は、何も知りもしないが、知っているとも思っていない。(P24 ~ 25)
4. (詩人は)多くの美しいことを語りはするが、しかし、自ら語る場所の真義については何らの理解もしていない。
同時に、彼らはその詩才の故に、他の事柄についても - 事実しからざるにもかかわらず - 世界最大の知者をもって自ら任じている。(P26)
5. 手工者らは皆、その業とせらる技芸に熟練せる故をもって、他の最も重大な事柄に関しても最大の識者であると信じていた。しかも、彼らのこの謬見が彼らの具えていた智慧に暗影を投げていた。(P27)
6. 真に賢明なのは独り神のみであります。
人智の価値は僅少もしくは空無である。
人間達よ、汝らのうち最大の賢者は、例えばソクラテスの如く、自分の智慧は、実際何の価値もないと悟った者である。自分ではいかにも何か知っているらしく自惚れているが、その実、ほとんどもしくは全然、何事も知らぬ人達がきわめて夥しい。(P28)
7. 「ソクラテスよ、君はここを立退いてから、沈黙して静かな生活を送ることは出来ないのか」
それは神命に背くことに外ならない。
またそれ故にじっとしていることは私にとって不可能である。
人間の最大幸福は、日毎に徳について、ならびに、私が自他を吟味する際にそれに触れるのを諸君が聴かれたような諸他の事柄について語ることであって、魂の探究なき生活は人間にとり生甲斐なきものである。(P61)
8. 死を脱れることは困難ではない。
むしろ悪を脱れることこそ遥かに困難なのである、それは死より疾く駆けるのだから。(P64)

[コメント]

暑い夏の日、自分自身の無知とは何かに直接対峙せざるをえない「ソクラテスの弁明」に触れることは、最もよい過ごし方かも知れない。いつ読んでも緊張感あふれる書。折に触れて読まないでは、人間として生きていく上で済ますことのできない書。それが、この「ソクラテスの弁明」だと思う。

- 2009年8月23日林明夫記 -